程度副詞と命令のモダリティ

林　　奈緒子

0．はじめに

工藤（1983）で指摘されているとおり[1]、程度副詞は、命令（禁止）・誘いかけ・意志・希望などのモダリティとの間に共起制限が見られる。

（1）　a．　僕はだいぶ食べた。
　　b．??僕はだいぶ食べよう。
（2）　a．　彼はたいへん頑張った。
　　b．＊たいへん頑張れ。

本研究では、程度副詞とモダリティとの関係を明らかにするための第一歩として、程度副詞と命令のモダリティとの間に見られる共起制限を記述し、解釈を与えることを試みる。

1．

本稿で扱う現象は程度副詞[2]全般に見られるものであるが、ここでは（3）に挙げる程度副詞を実際の分析対象としながら[3]考察を進めていきたい。

（3）あんまり，かなり，けっこう，ずいぶん，すごく，少し，ずっと，全然，相当，そんなに，たいして，だいぶ，たいへん，多少（は），ちょっと（は），とても，なかなか，ばかに，ひじょうに，ひどく，もっと，やけに，やや

これを、命令のモダリティを持つ文に出現するか否かという視点から分けると、次のようになる。（4）が命令のモダリティを持つ文に出現するもの、（5）が出現しないもの、（6）が判断に揺れが見られるものである。

（4）あんまり，そんなに，多少は，ちょっとは，もっと
（5）かなり，けっこう，ずいぶん，すごく，ずっと，全然，相当，たいして，だいぶ，たいへん，とても，なかなか，ばかに，ひじょうに，ひどく，やけに，やや
（6）少し，多少，ちょっと

結論的にいうと、（4）～（6）のように差が出てくる要因として、次の二点を指摘しうる。

（7）Ⅰ）命令のモダリティを持つ文に出現するのは、渡辺（1990）でいう比較系の程度副詞であるか、あるいは指示性の意味素性を持つもののみである。
Ⅱ）評価性の意味素性を持つ程度副詞は、命令のモダリティを持つ文に出現しにくい[4]。

以下で、この二点について詳しく見ていきたい。

2．比較／非比較

渡辺（1990）は、「XはYより――――Aだ」という比較構文に出現するか否かによって、程度副詞を二つに分類しており、前者を比較系の程度副詞、後者を発見系の程度副詞（非比較系の程度副詞[5]）としている。これに従って、（3）に挙げた程度副詞を分類すると以下のようになる。

（8）かなり，少し，ずっと，だいぶ，多少（は），ちょっと（は），もっと，やや
（9）けっこう，ずいぶん，すごく，相当，たいへん，とても，なかなか，ばかに，ひじょうに，ひどく，やけに
（10）あんまり，全然，そんなに，たいして

（8）は比較系の程度副詞であり、（9）は非比較系の程度副詞である。渡辺では否定と呼応する程度副詞は扱われておらず、渡辺のいう比較構文では否定と呼応する程度副詞がどちらに位置づけられるのかを判断することはできない。比較構文に代わるテストが必要であるが、ここでは判断できないグループ（10）としておく。

（4）の命令のモダリティを持つ文に出現する程度副詞は、（8）（10）に分布する。比較系の程度副詞であるか否かが、この現象に関わっているという仮説を立てて、程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現したときに見られる共通性を記述していくことにする。

3．基準としての発話時の状況

命令のモダリティを持つ文に出現する程度副詞の共通性として、工藤（1983）に指摘があるので、まずはそれを確認したい。

（11）　もっと正直に言ってみたまえ。（人間の壁）
こう良人を、何とかして理解し、何とかしてもっと好きになろうと、努力もしてみたつもりだった。（人間の壁）

すみませんが、もう少し後にしていただけないでしょうか。(人間の壁)
もう少しましなことを考えたらどう？ (シナリオ津軽じょんがら節)

のように、現状より程度量が増加することを表しうる「もっと・もうすこし」は、かなりひんぱんに、この命令等の叙法とともに用いられる。(p191)

この工藤の記述は、これから本稿で指摘する、程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現するときに見られる共通点の一部に一致するものである。しかし、否定と呼応する程度副詞をも考慮に入れると、当の程度副詞が「現状より程度量が増加することを表し」ているという記述では充分とは言えないことが明らかになろう。

では、程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現するときの共通性について、詳しく見ていきたい。

(12) a．(泣いている人に) そんなに泣くな[6]。
　　b．＊(泣いていない人に) そんなに泣くな。
(13) a．(泣いている人に) もっと泣け。
　　b．＊(泣いていない人に) もっと泣け。

(12) (13) から、「そんなに」「もっと」が命令のモダリティを持つ文に出現するためには、「泣く (聞き手が泣いている)」という事態が成立していなければならないことがわかる。一方、「あんまり」は事態が眼前に成立していなくとも、事態の成立が充分予測できるものとして見込まれていれば、ごく自然な文として許容できる。以下の例を確認されたい。

(14) a．(泣いている人に) あんまり泣くな。
　　b．(泣いていないが、これから泣くことが予想される人に) あんまり泣くな。
　　c．＊(泣いておらず、これから泣くことも予想されない人に) あんまり泣くな。

「あんまり」「そんなに」「もっと」が命令のモダリティを持つ文に出現する条件をまとめると、以下のようになる。

(15)「あんまり」「そんなに」「もっと」が命令のモダリティを持つ文に出現するためには、話し手によって、動詞の表す事態が成立している、あるいは成立すると判断される必要がある。

これを、上記三つの程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現するための「前提」とする。一方、「多少は」「ちょっとは」が命令のモダリティを持つ文に出現するか否かも、話し手が事態をどのように捉えているかに関わる。

(16) a.＊（頑張っている人に）多少は頑張れ。
　　b.　（頑張っていない人に）多少は頑張れ。
(17) a.＊（頑張っている人に）ちょっとは頑張れ。
　　b.　（頑張っていない人に）ちょっとは頑張れ。

「多少は」「ちょっとは」が命令のモダリティを持つ文に出現するための前提は、以下のようになろう。

(18)「多少は」「ちょっとは」が命令のモダリティを持つ文に出現するためには、話し手によって、動詞の表す事態が成立していないと判断される必要がある。

(15)(18)の前提は、命令のモダリティを持つ文に出現するときだけでなく、依頼のモダリティを持つ文に出現するときにも当てはまる。

また、上記五つの副詞が命令のモダリティを持つ文に出現したときには、(15)(18)の前提以外に、次のような関係が成立していると考えられる。

(19)「多少は」「ちょっとは」
　前提：動詞の表す事態が成立していないという、話し手の判断。
　要求：判断の根拠となった程度より大きい程度→「多少は」「ちょっとは」による提示[7]。
　比較：前提となっている（判断の根拠となった）程度と要求されている程度。
(20)「もっと」
　前提：動詞の表す事態が成立しているという、話し手の判断。
　要求：判断の根拠となった程度より大きい程度→「もっと」による提示。
　比較：前提となっている（判断の根拠となった）程度と要求されている程度。
(21)「そんなに」
　前提：動詞の表す事態が成立しているという、話し手の判断。
　要求：判断の根拠となった（指示されている）程度より小さい程度。
　比較：前提となっている（判断の根拠となった）程度と要求されている程度。
(22)「あんまり」
　前提：動詞の表す事態が成立している、あるいは成立するという、話し手の判断。
　要求：判断の根拠となった程度より小さい程度。
　比較：前提となっている（判断の根拠となった）程度と要求されている程度。

「多少は」「ちょっとは」「もっと」は比較系の程度副詞であり、前提となっている事態の程度を比較媒体として、話し手の要求する程度を提示する。「そんなに」は指示性を持っ

ているので、成立している程度そのものを否定命令（禁止）によって否定することで、実現している程度より小さい程度を要求しているものと考えられる。「あんまり」は比較系の程度副詞か否かが判断できなかったものでもあり、指示性を持っているとも考えられないが、否定命令において用いられること、前提・要求・比較の内容は、「そんなに」と同じものである。

更に、次の例も参照されたい。

(23) a．（頑張っている人に[8]）もう少し頑張れ。
　　b．＊（頑張っていない人に）もう少し頑張れ。
(24) a．（頑張っている人に）もうちょっと頑張れ。
　　b．＊（頑張っていない人に）もうちょっと頑張れ。
(25)「もう少し」「もうちょっと」
　　前提：動詞の表す事態が成立しているという、話し手の判断。
　　要求：判断の根拠となった程度より大きい程度→「もう少し」「もうちょっと」による提示。
　　比較：前提となっている（判断の根拠となった）程度と要求されている程度。

累加を表す副詞「もう」を伴う「もう少し」「もうちょっと」も全体として比較系の程度副詞として振る舞う。この場合の前提・要求・比較の内容は「もっと」のそれに等しく、要求される程度の大きさのみが異なっている。

なお、否定と呼応する「あんまり」「そんなに」と、呼応しない「多少は」「ちょっとは」「もっと」「もう少し」「もうちょっと」との間には、次のような違いがある。

(26)

	判断の根拠となった程度	要求
多少は	顕在化していない	「多少は」によって提示
ちょっとは	顕在化していない	「ちょっとは」によって提示
もっと	顕在化していない	「もっと」によって提示
もう少し	顕在化していない	「もう少し」によって提示
もうちょっと	顕在化していない	「もうちょっと」によって提示
あんまり	「あんまり」によって提示	顕在化していない
そんなに	「そんなに」によって提示	顕在化していない

ここまで、程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現したときに見られる共通性を記述してきたが、これをまとめると次のように言えよう。程度副詞が命令のモダリティ

を持つ文に出現したときには、命令（のモダリティを持つ）文は発話時の状況において捉えられる程度を基準として発せられる。この基準は、指示性の意味素性を持つ程度副詞を含む命令（のモダリティを持つ）文においては、当の程度副詞の表す程度が基準となる程度に一致する。そのため、文全体としては発話時の状況において捉えられた程度そのものを否定することになる。一方、比較系の程度副詞は、発話時の状況において捉えられた程度をその比較の基準とし、文全体でその基準よりも大きい程度を要求する。

4．評価性の意味素性

程度副詞が命令のモダリティと共起しているときに、前提・要求・比較の関係が成り立っているということを確認してきた。この前提・要求・比較の関係は、当の程度副詞が比較系の程度副詞であるか、あるいは指示性の意味素性を持っていなければ成立しないと考えられる。以上から、比較系の程度副詞であること、あるいは指示性の意味素性を持っていることは、程度副詞が命令のモダリティと共起するための条件と捉えられよう。ここでは更にもう一つ条件の提示をおこないたい。

(27) Ⅰ：比較系の程度副詞である。あるいは、指示性の意味素性を持っていると判断できる。
　　Ⅱ：評価性の意味素性を持っていない。

工藤（1983）は、程度副詞が「命令等の叙法」と共起しない理由として、「評価性」を挙げている。

(28) なんらかの評価を表すものが命令等の叙法と共起しないのは、評価を下すためには、その対象が実現しているか、少なくとも実現が予定されている必要があるからだと考えられる。(p195-196)

本稿では、工藤の解釈の妥当性を認め、程度副詞の命令のモダリティを持つ文への出現を左右する条件として、評価性の有無を加えたい。工藤では、ある副詞が評価性を持っているか否かを判断する基準には触れていない。ここでは、この評価性の有無を、以下のような方法で判断することを試みてみたい。

(29) a．僕は困っている。
　　b．僕はすごく困っている。
　　c．＊僕はやけに困っている。
(30) a．彼は困っている。
　　b．彼はすごく困っている。
　　c．彼はやけに困っている。

(29) (30) のテストは、評価は他者の状態には下しやすいが、自己の状態には下しにくいという根拠によっている。ただし、以下のようにテンスを過去にした場合は、自己の状態を客体化しやすいので許容される。

(31) あの時の僕はやけに困っていた。

命令のモダリティを持つ文に出現しない程度副詞・判断に揺れが見られる程度副詞・出現する程度副詞について (27) の二つの条件に該当するか否かを確認したものが、それぞれ (32) (33) (34)[9]である。

(32) 命令のモダリティを持つ文に出現しない程度副詞

I：比較系の程度副詞である。あるいは、指示性を持っていると判断できる。

II：評価性を持っていない。

	I	II		I	II
かなり	○	×	たいへん	×	○
けっこう	×	×	とても	×	○
ずいぶん	×	×	なかなか	×	×[10]
すごく	×	○	ばかに	×	×
ずっと	○	○	ひじょうに	×	○
全然	−	○	ひどく	×	×[11]
相当	×	×	やけに	×	×
たいして	−	×	やや	○	×
だいぶ	○	×			

(33) 判断に揺れが見られる程度副詞

I：比較系の程度副詞である。あるいは、指示性を持っていると判断できる。

II：評価性を持っていない。

	I	II		I	II
少し	○	×	ちょっと	○	×
多少	○	×			

(34) 命令のモダリティを持つ文に出現する程度副詞

Ⅰ：比較系の程度副詞である。あるいは、指示性を持っていると判断できる。

Ⅱ：評価性を持っていない。

	Ⅰ	Ⅱ		Ⅰ	Ⅱ
あんまり	―	○	ちょっとは	○	○
そんなに	○	○	もっと	○	○
多少は	○	○			

(32) のグループでは、二つの条件によっては説明できないものとして「ずっと」「全然」がある。「全然」は、Ⅰについては渡辺のテストでは判断できなかったものである。比較構文以外のテストを設けて判断することが求められる。「ずっと」は比較系の程度副詞であるが、眼前の事態を比較媒体としないことを説明する必要があろう。(33) のグループでは、それぞれⅠの条件にのみ該当することがわかるが、(32) のグループにも、同じ該当状況の程度副詞（「かなり」「だいぶ」「やや」）があるにも関わらず、出現しないものと揺れがあるものというように、許容度に差が出てくることを説明する必要がある。また、(34) のグループでも、「あんまり」について、比較構文以外のテストが必要なのは「全然」の場合と同様である。

このように、(32) の該当状況を見ると、二つの条件のみで程度副詞と命令のモダリティとの間に見られる共起制限を記述していくことに疑問が残る。他にも共起を制限する条件が見出せないかという点において、検討の余地がある。あるいは、個別的に事例を再検討する必要もあろう。とはいえ、命令のモダリティを持つ文に出現するグループである (34) の該当状況から、(27) に挙げた二つの条件に妥当性があることは見てとれる。工藤に（27Ⅰ）の妥当性を保証すると思われる記述があるので、それを引いておこう。

(35) 「すこし・ちょっと」は、モノや時間の量を表す場合には、「すこし食べろ／ちょっと待て」のように、問題なく言えるのだが、程度用法においては、

少し急いでくれよ。（シナリオ日本沈没）

君、少し自重しろよ。（自由学校）

など、文脈的に「もう少し」の意に解しうるものが、少数見られるにとどまるようである。(p192)

工藤の指摘は、本稿でいうところの判断に揺れが見られるグループも文脈的に前提・要求・比較の関係が補われれば、命令のモダリティを持つ文に出現する、と解釈しうるものである。5節で再び触れるが、本稿では、程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現する条件として、(27Ⅰ) をより本質的なものと考える。

5．おわりに

工藤のように非常に示唆的な研究が見られるものの、程度副詞とモダリティとの関係は、これまで充分に議論されてきたとは言い難い。本稿では、程度副詞のモダリティとの関わりを明らかにするための第一歩として、程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現するときにどのような現象が見られるかを確認した。

まず第一点として、命令のモダリティを持つ文に程度副詞が出現しているときには、前提・要求・比較の関係が成り立っていることを挙げた。発話の場に成立している（成立していない）と判断された状況の示す程度を基準として比較がおこなわれることによって、命令のモダリティを持つ文における要求が明示される。本稿では、程度副詞が比較系のものである、あるいは指示性の意味素性を持っていることが、上記の前提・要求・比較の関係を成り立たせているものと見て、これを程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現するための条件とした。

第二点として、工藤が指摘している評価性という概念が、命令のモダリティを持つ文への程度副詞の出現を左右していることを確認した。命令が未成立の事態に関わっているのに対して、評価は既に成立している事態に関わるものであり、両者は相容れない。本稿では、ある程度副詞が評価性を持っているか否かを、自己への評価の在り方が制限されていることを用いて判断した。そして、評価性を持っていないことを、程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現するための第二の条件とした。

ここで提示した二つの条件のうち、程度副詞と命令のモダリティとの共起を本質的に支えているのは、第一の条件であると考える。命令のモダリティを持つ文とは、それが発せられることによって要求がおこなわれる文である。ただ程度を示すだけでなく、その程度を発話時に成立している（成立していない）と判断された程度を基準として提示することによって、明確に要求内容を示すことが可能になる。第一の条件は、命令のモダリティを持つ文における要求が明示されるために、命令のモダリティを持つ文に出現する程度副詞がいかなる性質を備えていることが求められるかを規定するものである。この問題については、命令のモダリティを持つ文そのものを再検討した上で、稿を改めて解釈を試みたいと考えている。

また、本稿では程度副詞が命令のモダリティを持つ文に出現する条件として、二つを提示するのみに終わったが、この現象に関わる条件がこの二つに限られるものなのかどうかを検討する必要があることは、すでに指摘したとおりである。今後、程度副詞と他のモダリティとの関係を分析・記述する中で、明らかにしていきたい。

注

1）工藤の挙げている例は、次のとおりである。

?非常にはやく走りなさい。
＊だいぶたくさん作ってください。

＊とてもゆっくり歩きませんか。
＊なかなかじょうずに書こう。

2）本稿でいう「程度副詞」は、品詞論でいわれるところのものに限らない。ここでは、連用修飾成分の中で状態修飾に関わるものを「程度副詞」と呼ぶ。
3）「甚だ」のように文語的なもの、「すっかり」のようにアスペクト的な側面に関わるもの、「さっぱり」のように情態的な側面に関わるものを除外し、分析の対象を（3）のように限定した。
4）それぞれの程度副詞の記述については、林(1996)を参照されたい。同稿は比較系／非比較系、量性・評価性・指示性の意味素性という観点から、程度副詞の記述・分類を試みたものである。
5）渡辺の発見系の程度副詞を、本稿では非比較系の程度副詞と呼ぶ。これは、渡辺の「とても」類・「結構」類（比較系でない程度副詞）の使用を支えているのは「発見」であるとの考えに、必ずしも賛同しないことによる。
6）（12ａ）以下の命令のモダリティを持つ文は、イントネーションによって許容度に差がある。これはそれぞれの文が、井上（1993）による矛盾考慮／矛盾非考慮のいずれに解釈されやすいかということに関わる問題である。本稿ではこの問題に深く立ち入ることはせず、いずれかのイントネーションで許容されれば許容できる文として扱い、いずれのイントネーションでも不自然なもののみに＊をつけて許容できない文として扱うこととする。
7）「多少は」「ちょっとは」の場合には、動詞の表す事態が成立していない。したがって、ここで前提となっている（判断の根拠となった）程度は、いわば程度ゼロである。「多少は」「ちょっとは」が出現した命令のモダリティを持つ文は、程度をゼロでなくすることを要求するものであるといえる。
8）ここでは、聞き手が実際に頑張っているかどうかが問題とされているのではなく、話し手が「聞き手が頑張っている」と判断しているかどうかが問題となっている。したがって、実際には頑張っていない聞き手に対して、「君が頑張っていないというわけではないが」という婉曲的な姿勢を示すために、(23ａ）が発話されることは当然予想される。
9）それぞれ、該当する場合は○、該当しない場合は×で示した。したがって、×がないものほど、命令のモダリティを持つ文に出現する条件を満たしていることになる。
10）「なかなか」は語彙的な制約があるため、「僕は頑張っている」という文でテストした。
11）許容できるという意見もあり、あるいは△とするのが適当かもしれない。

参考文献

井上　優　1993,「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』――命令文・依頼文を例に――」,『研究報告集４』, 333-360, 国立国語研究所
工藤　浩　1983,「程度副詞をめぐって」, 渡辺実編『副用語の研究』, 176-198, 明治書院
丹保健一　1981,「程度副詞と文末表現―――「ひじょうに」を中心に―――」,『金沢大学語学・文学研究』2号, 22-30
寺村秀夫　1991,『日本語のシンタクスと意味III』, くろしお出版
仁田義雄　1991,『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房
林奈緒子　1996,「意味素性による程度副詞の記述」,『筑波応用言語学研究』３号, 13-26
原田登美　1982,「否定との関係による副詞の四分類」,『国語学』128号, 138-122
益岡隆志　1991,『モダリティの文法』, くろしお出版
渡辺　実　1990,「程度副詞の体系」,『上智大学国語学論集』23号, 1-16

付記　本稿は1996年、筑波大学地域研究研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。

（はやしなおこ　筑波大学大学院　博士課程文芸・言語研究科　応用言語学）